言葉を手がかりに読みを深める授業
―「ごんぎつね」の実践から―

山形県最上郡金山町立金山小学校
佐藤　美紀

はじめに

本校では全国小学校国語科教育研究大会において授業を公開するという機会を与えられ、国語科の中でも「読む」ことに焦点を当てて実践研究を続けている。「読む」ことの基礎・基本を明らかにして、言葉を手がかりに読みを深める授業をめざしてきた。読みの力をつけるためにどのような手立てで指導にあたるかを単元計画に位置づけるようにしている。

「ごんぎつね」は四年生教材としてどの教科書会社にも取り上げられている、新美南吉の名作である。ひとりぼっちの子ぎつね、ごんと兵十との心のすれ違いが美しい情景描写と共に描かれている。悲劇的な結末が印象的で、四年生の児童が優れた表現を味わいながら、心の交流について深く考えることができる作品である。

話を場面ごとに区切り深く内容に刺さって学習を進めていくという従来の単元計画からの変更が求められるなかで、「場面の移り変わりや情景を、叙述をもとに想像しながら読む」という基本的能力を習得させるために、物語をまるごと読んで学習する時間と、言葉にこだわって情景を読み深める時間を単元の中に位置づけることにした。

学習の流れ

1「ごんぎつねマップ」を作り、場面の様子をとらえ物語を概観する。

①登場する山、川、家、道などをリストアップして「ごんぎつねマップ」を作り、場面の様子をとらえる。

②場面の様子を話し合い、視覚的、聴覚的言葉をマップに書き込み、表現の効果に気づく。

この学習では、自分の物語マップを構成することを目当てに「視覚的な言葉」「聴覚的な言葉」などのテーマをもって読んでいくため、言葉から情景を想像することについてはどの子でもこだわりなく取りかかり、考えをノートに書いたりグループで考えを交流したりすることができるようになっていた。

また「～の言葉について」などとテーマに沿って全文を通した読みを経験することで、子どもたちは内容をある程度わかった上での課題を生じることができた。学習計画を話し合いながら作り、より深く読みたい場面や考えたい場面、たくさんの立ち止まりがあった言葉などが意識化され、自分の初発の感想について自分で評価することができていた。

2 一つの言葉に立ち止まり、そこから考えを広げ深める。

マップを作ることでごんの境遇はとらえることができていたので、心情を深く考えさせたい場面を五の場面、六の場面にした。五の場面に立ち止まりたい言葉（視覚的、聴覚的）が多く、六の場面で考えを交流させたいと課題を設定した子どもたちが多かったためである。

課題と主発問（□）

ごんと兵十の気持ちの動きを読みましょう。

□なぜ、ごんはいたずらばかりするのでしょうか。
□「ひとりぼっちの兵十か。」の後にどんな言葉が続くのでしょうか。
□ごんはどうして兵十たちについていったのでしょうか。
□兵十の気持ちはどこで変わったのでしょうか。

五の場面では情景を読みとらせたい言葉を「（兵十の）かげぼうしをふみふみ」とした。この言葉について発問する（「かげぼうしをふみふみ」からどんなことがわかるだろう。）ことで兵十とごんとの距離や状況、ついていくごんの気持ちまでも考えることができた。

・話が聞きたくて近づいていることが分かる。
・気づかれないように少し離れている。（一メートルか二メートルくらい）
・つかまるのがこわいけど、自分のことをどう思ってるかを知りたくてついて行っていると思う。

ペープサートを用いて、ついていくごんをイメージさせる。

この言葉を深める学習の仕方は

①～の様子（気持ち）が分かる言葉を探す。（サイドラインを引く。）
②その言葉から分かることを説明する。（その語を選んだ理由づけをする。）

ということで次の場面では自分たちで考えを交流し、深めることができた。

六の場面では、「兵十の様子が分かる言葉」に視点を当てた。ある子どもの「兵十はかけよっていきました。」という発言に、「かけよってきました」という言葉との違いに気づいて「『かけよっていきました』じゃないから～」という話題でごんの様子や気持ちを話し合うことができた。

・ごんが兵十に最後に分かってほしかったから、待っている気持ちが分かる。
・他は兵十がしたことなのに、これはごんが見たことで書いている。
・まだごんが生きていることが分かる。

言葉について考える学習効果で言語感覚が鋭くなっていること感じることができた場面であった。

おわりに

この学習の後、自分が読んだ本についてマップを作って読み取ろうと試みたり、心情曲線を作って登場人物の気持ちを読み取ろうとする子もいて、言葉や読書への関心が高まったことを感じた。ともすれば理解に長い時間をかけて、かえって子どもの読む意欲を減退させてしまいがちな学習だが、扱い方の工夫で効果があり、収穫の多い学習であった。

さとう　みき　「言葉は心」を実感する毎日。国語の授業についてさらに研修を深め、「楽しく読む」授業をめざしている。